４－１　緊急消防援助隊

４－１　緊急消防援助隊各隊による報告

※職員の所属、職名は報告書作成時のもの

３月

(1) 第１次派遣隊（宮城県仙台市：３月１１日～３月１５日）……３６
消火隊　消防司令 太田義夫、消防司令補 川島 衛、消防士長 岸 加寿美、消防士長 新倉智明、消防士 吉川悠貴
後方支援隊　消防司令 野島　肇、消防士長 三町永則

(2) 第２次派遣隊（宮城県仙台市：３月１４日～３月１８日）……３８
消火隊　消防司令補 内山正博、消防司令補 城戸秀臣、消防士長 木村 誠、消防士長 今澤智広、消防副士長 清水宏之
後方支援隊　消防司令 武田芳亮、消防副士長 吉冨憲義

(3) 第３次派遣隊（宮城県仙台市：３月１７日～３月２０日）……４０
消火隊　消防司令 鈴木芳典、消防司令補 本間正光、消防士長 小澤宗哲、消防士長 有福敏彦、消防士 吉田健輔
後方支援隊　消防司令補 岡林良太、消防士長 平山陽二郎、消防士 三戸裕明

(4) 第４次派遣隊（福島県福島市：３月１９日～３月２３日）……４２
救急隊　消防司令補 内山 猛、消防司令補 渡辺 毅、消防士 三枝北斗
後方支援隊　消防司令 森田 学、消防士長 阿部友和

(5) 第５次派遣隊（福島県福島市：３月２２日～３月２５日）……４４
救急隊　消防司令補 矢野謙一、消防司令補 小林 孝、消防副士長 松田峰由紀
後方支援隊　消防司令 池内清人、消防副士長 金子須寿美

(6) 第６次派遣隊（福島県福島市：３月２５日～３月２８日）……４６
救急隊　消防司令 新倉直明、消防司令補 吉田英治、消防司令補 雲野文夫
後方支援隊　消防司令 笹原優孝、消防士長 政近年男

(7) 第７次派遣隊（福島県福島市：３月２８日～３月３１日）……４８
救急隊　消防司令 鈴木友美、消防司令補 中島暢康、消防副士長 清水晃弘

後方支援隊　消防司令補 上田憲一、消防士長 湯田 敦

(8) 第８次派遣隊（福島県福島市：３月３１日～４月３日） …… ５０
救急隊　消防司令補 竹永 寛、消防司令補 堤 好正、消防士 山際正則
後方支援隊　消防司令 内田芳久、消防副士長 安彦 徹

５月

(9) 第１１次派遣隊（福島県福島市：５月４日～５月８日） …… ５２
救急隊　消防司令補 内藤繁幸、消防副士長 高橋圭介、消防副士長 関戸博章
後方支援隊　消防司令補 譲原宏太、消防士長 前 真一郎

緊急消防援助隊　３月１１日 ～ ３月１５日（５日間）

茅ヶ崎市消防本部　第１次派遣隊

【派遣先】　宮城県仙台市

消火隊　太田義夫、川島 衛、岸加寿美、新倉智明、吉川悠貴

後方支援隊　野島 肇、三町永則

報告者　岸加寿美

災害派遣（出発）までの状況

宮城県へ向け出動

平時より緊急消防援助隊としての出動体制を整えているため、震災当日でも慌てることなく準備ができました。また、日頃から家族にも災害発生時には緊急消防援助隊として被災地に出動することを伝えていたため、家族への連絡も満足に取れない状況でも出動できました。

災害派遣途上（出動途上）の状況

高速道路のサービスエリアで給油兼休憩の際に、通行止めのため営業を停止していたにも関わらず、従業員の方々から暖かい激励の言葉と共に、食料等を提供していただき、大きな力となりました。

サービスエリアで給油兼休憩

全国の緊急消防援助隊が被災地へ向かう

災害派遣場所での活動

活動現場の様子

人命検索及び救助活動の様子

野営の様子

テントの中

震災直後と状況が変わらない中、人命検索及び救助活動実施中も余震が続き、大津波警報等が発表され、緊急退避を余儀無くされました。活動場所周辺の退避場所となる建物等は、既に倒壊や被害を受けているため、退避場所への移動も困難で、１時間以上も活動を中断し待機した時は不安な気持ちに駆られました。

第１次派遣隊のメンバー

災害派遣場所の様子

活動拠点となる野営場所から活動場所への移動の際、震災直後にも関わらず、地元住民の方々が緊急車両の通行を優先してくれました。一見あたりまえの様な行動でも、地元住民の方々の気持ちが強く伝わってきました。

派遣を振り返って

今回の災害派遣について、円滑な活動を行うために必要な知識及び技術は、日常的な訓練がいかに反映されるかを痛感した結果となりました。このことから、隊員個人の知識、技術の向上及び修得のため、訓練と研修の継続が必要だと感じました。

燃料や食料等の調達及び確保については、保管してある非常用のものだけでは十分な量とは言えず、災害発生時には、これらを優先的に提供してくれる事業所などをあらかじめ選定しておくことも今後の課題と考えます。

一番印象に残ったのは、出場途上に暖かい激励の言葉を掛けてくれた方々の暖かい気持ちが、私たちにとってとても大きな力となり、安全な活動に繋がったことです。

緊急消防援助隊　３月１４日 ～ ３月１８日（５日間）

茅ヶ崎市消防本部　第２次派遣隊

【派遣先】　宮城県仙台市

消火隊　内山正博、城戸秀臣、木村 誠、今澤智広、清水宏之

後方支援隊　武田芳亮、吉冨憲義

報告者　内山正博

神奈川県緊急消防援助隊第２次派遣隊出発

川崎市犬蔵消防訓練場に集結

東北自動車道の様子

３月１２日１７時１５分に第２次派遣隊として７人が選出され、３月１４日５時１５分の出発が決定されました。当日は、県内各消防が川崎市犬蔵消防訓練場に集結し、８時３５分に神奈川県緊急消防援助隊第２次派遣隊として５０隊２３６人が宮城県仙台市に向けて出発しました。東名高速、首都高速、東北自動車道を緊急走行し、東北圏に入ると応急修理はしてあるものの、道路の損壊が激しくなり走行速度も低下せざるを得ない状況で、現地到着まで多くの時間を要し、１７時１５分に仙台市消防局宮城野消防署隣地の進出拠点（野営地）に到着しました。

製鉄工場所内での活動

雨から雪に変わる気温低下の気象状況と激しい余震が時折起きる中、現地消防の案内で津波により水没した製鉄工場内の目視による人命検索を行いました。津波による被害を避け建物の高所へ避難した方が、津波が引くまでの間に寒さにより凍死していた事象も伝達され、３階建の事務所棟や高所部の検索を行い、その後、生産ライン棟への検索を行いました。各建物は、１階あるいは２階までが津波により破壊されている状態でした。

活動場所付近の様子

製鉄工場の様子

被災者を発見

製鉄工場内、向洋緑地内体育館での活動

野営地に設置したエアーテントが深夜に雪の重みで損壊し、復旧に時間がかかり、夜が明けてしまいました。前日に引き続き製鉄工場内の検索を行いました。停電のため、照明が無ければ視界ゼロで、さらに余震により粉じんの舞い上がりや足元が揺らぎ、活動が阻害される場面もありました。場所によっては密集したプラントが数多く有り、円滑な退避路の確保が困難であったため、相当なストレスを感じました。その後、隣接する緑地の中にある被災した避難所（体育館）の検索を行いました。

深夜から降り続いた雪

現場には徒歩で移動

暗闇の工場内

高砂コンテナターミナル、蒲生干潟、蒲生二丁目での活動後帰還

ＬＰガスボンベが横たわる状態

製鉄工場内の検索活動終了後、隣接のコンテナヤードで検索を行いました。関係者からコンテナは風で飛ぶという情報を得ていたので、十分な安全確認が必要でした。その後、蒲生干潟の検索と一般住宅と中小工場が密集する地域の検索へと移行しました。この地域の木造建物は粉砕状態であり、なぜかＬＰガスボンベが数百本横たわる状態で密集し、足場の確保がとても難しい所でした。

すべての活動が終了し、使用機材の整備や消耗品の補給後、第３次派遣隊の到着を待ち、引き継ぎと資機材の積込みが終わった時には日付が変わっていました。東北圏内は路面が凍結しており、チェーン着装での走行が必須のため走行時間を要すること、また深夜走行であり前日までの活動による疲労も考慮し、休憩をしながら全員で運転を交代して、１０時２０分、無事に帰署しました。

派遣を振り返って

地震発生の翌日１２日には１４日からの派遣が決定されましたので、時間的に余裕があり家族に派遣のことを伝えることができました。また、自分に必要な物資の調達ができましたので、準備時間があるということは精神衛生上もよく、出動に際し、活力の向上にとても有効であると感じました。神奈川県隊として５０隊２３６人が集結し、陸路を緊急走行で向かうことは初めての経験でしたが、消防が県単位を一つの部隊として行動することは組織力、機動力、補給力、マンパワーの充実と強化においても、このような大災害時にはとても有効であり、かつ重要なことです。今後も訓練などを通じて、さらなる連携の強化が必要だと感じました。

緊急消防援助隊　３月１７日 ～ ３月２０日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第３次派遣隊

【派遣先】　宮城県仙台市

消火隊　鈴木芳典、本間正光、小澤宗哲、有福敏彦、吉田健介

後方支援隊　岡林良太、平山陽二郎、三戸裕明

報告者　有福敏彦

派遣が決まってから、出発までの準備

第１次派遣隊が被災地で活動している時に、私が第３次派遣隊として被災地に派遣されることが決まったので、出発まで数日間の準備期間がありました。帰署した第１次派遣隊の様子から、現地での活動がとても過酷だったことは容易に想像でき、身が引締まったことを覚えています。家族の「頑張ってきてね。」という言葉に励まされながら準備しました。

出発から、野営地到着まで

宮城県へ向け出動

朝６時３０分に消防署を出発、川崎で神奈川県隊と合流して宮城県に向かいました。東北自動車道は緊急車両しか通行できなかったのですが、サービスエリアは全国からの消防、警察、自衛隊の車両で混雑し、給油に２時間もかかりました。また道路は北進するにつれ、路肩の崩壊や陥没が酷くなりました。宮城県に入る頃にはチェーンを装着しなければ走行できないほどの積雪となっていて、現地到着に約１６時間かかりました。

警察車両

自衛隊車両

チェーン装着

野営地における茅ヶ崎隊の生活

野営地

エアーテント内

食事は保存食のお粥と五目御飯、カップラーメン、缶詰を食べていました。着替えについては、持っていける荷物に限りがあったため、下着を替える程度で、当然風呂やシャワーは無く、トイレは近くの消防署のトイレを借りました。私が行った時には水道が復旧しましたが、それまでは使えなかったそうです。夜はエアーテントの中で毛布を１人５枚と寝袋を２枚重ねにして、刺すような寒さをしのいでいました。外には雪が積もっていました。

被災地の様子

現地の救急車も被災

津波の被害を免れた地域では、ガラスが割れていたり、外壁が剥がれ落ちていたりしていました。消防車で検索地域へ向かう途中に目にした、深々と頭を下げる人や、目を真っ赤にしてがれきの中を歩いている人の姿がとても印象に残っています。常に余震で揺れていて、いつ津波が来てもおかしくない状況の中、消防車を高台に停車させて活動し、津波警報がでたらどこに退避するかを全員で確認しながらの検索でした。

派遣を振り返って

震災直後の被災地を実際に訪れることによって、余震の恐怖や、津波に破壊された街並みを見たときの絶望感など、テレビや新聞では知ることのできない現実を知りました。被災地での活動はやはり体力と装備が重要で、普段からの訓練やトレーニングの大切さを改めて実感しました。検索では、耐油手袋やゴム長靴、雨具がとても役立ったので、今後はそれらの装備をより充実させることも大切です。現地では被災者に接する機会はあまりありませんでしたが、車内で流れてくるラジオなどを聞いていると、社会全体が助け合いながら震災を乗り越えようとしている様子がわかり、自分もできることをできる限りしようと思いました。

緊急消防援助隊　３月１９日 ～ ３月２３日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第４次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　内山 猛、渡辺 毅、三枝北斗

後方支援隊　森田 学、阿部友和

報告者　内山 猛

医師及び災害時派遣医療チーム（ＤＭＡＴ）事務局員搬送

３月２０日４時４０分に拠点場所である福島県福島市あづま総合運動公園に到着し、１４時５３分に神奈川県隊として５隊の出動要請がありました。茅ヶ崎救急隊は福島県自治会館管理センターから福島医大まで医師搬送の依頼を受けました。あづま総合運動公園より出動し、１５時０７分に福島県自治会館管理センター（福島県福島市中町）に到着しました。医師１人及びＤＭＡＴ事務局員１人を収容し、福島県立医科大学付属病院（福島県福島市光が丘）まで搬送しました。１５時１８分に病院到着し、１６時２５分にあづま総合運動公園に到着しました。

福島県へ向け集合

あづま総合運動公園到着

ＤＭＡＴ事務局

医師搬送を実施

傷病者搬送

３月２１日８時４５分にあづま総合運動公園より出動し、１０時２２分に福島第一原子力発電所から約３５ｋｍの位置にあるサテライトかしま（福島県南相馬市）に到着しました。地元消防本部の救急隊により、避難区域の南相馬市大町病院（福島第一原子力発電所から約２５ｋｍ）から搬送されて来た傷病者（８５歳女性、肺炎で入院加療中の傷病者で会話可能）を１６時４４分に群馬県前橋市にある群馬県立群馬産業技術センターまで搬送し、２２時２０分に拠点場所であるあづま総合運動公園に戻りました。往復走行時間は約１２時間、走行距離は約７００ｋｍでした。

野営地の様子

第４次派遣対の寝泊まりしたテント

派遣を振り返って

傷病者を他県へ往復約７０ｋｍの長距離搬送等、活動内容は予想を遥かに上回る活動となりました。今回の活動は福島第一原子力発電所の事故もあり、被爆に対する不安がありましたが後方支援隊、救急隊共に異常なく戻る事ができました。今後も原子力発電所周辺での活動も考えられるので、被曝することが決して無いように装備品の充実を図っていきたいと思います。市民の生命、身体、財産を守る為に日々活動をしておりますが、今回の活動では、命の大切さを今まで以上に感じた活動になりました。

緊急消防援助隊　３月２２日 ～ ３月２５日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第５次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　矢野謙一、小林 孝、松田峰由紀

後方支援隊　池内清人、金子須寿美

報告者　松田峰由紀

派遣決定から出発まで

発災から１０日目、３月２１日の午前９時３０分頃、当直明けで自宅にいたところに派遣決定の連絡が入りました。既に現地で活動している隊員に連絡を取り、必要なものを確認し、最小限の食料と日用品を買い揃え、派遣の準備を行いました。翌日から始まる被災地での活動に備え、福島第一原子力発電所の被害状況等を把握しようとしましたが、メディアでは甚大な被害の様子ばかりが報道されており、不安を抱いたまま出発の日を迎えることになりました。

緊急消防援助隊

川崎消防に集結する神奈川県隊

全国から救急車が集結

全国各地から集結した救急車

被災地へ向かう道中は、消防や警察、自衛隊の車両の他、救援物資を搬送する大型トラックだけが通行している状況でした。福島県に入ると、震災による被害の跡が所々で見受けられ、目に飛び込んでくる光景は、発災直後からテレビに映り出されている光景そのものでした。活動の拠点となる福島県消防学校に到着すると、全国から集結した救急車が消防活動に備えて待機していました。

緊急消防援助隊救急隊の活動

福島第一原子力発電所から３０ｋｍ圏内へ入って活動を行うことはなく、３０ｋｍ圏外に位置するいわき市内の医療機関間の転院搬送を行いました。津波の被害を受けた病院に入院している重症患者１０８人を、２日間で比較的被害の少なかった病院へ転院搬送するという任務が福島県消防学校に集結した７県５８隊の救急隊に下され、神奈川県隊の茅ヶ崎救急隊は、そのうち２人の重症患者を転院搬送しました。

救急車による転院搬送

津波で被災した病院

懸念されていた放射線被曝

福島第一原子力発電所から３０ｋｍ圏外の安全区域内での活動でしたが、放射線被曝が懸念されていたため、携帯放射線被曝線量計を各個人で携行して消防活動を行いました。活動後に測定した放射線被曝量は１日でごく微量の０．００７ｍｓｖ程度であり、人体に影響を及ぼすほどのものではありませんでした。

活動後の放射線スクリーニング

携帯型放射線被曝線量計

派遣を振り返って

甚大な被害が出た被災地での救急活動はとても厳しいものでしたが、緊急消防援助隊として発災直後から消防活動が行えたことは、他の何にも変えられない貴重な経験となりました。最も被害が大きかった宮城・福島・岩手の３県で、救急車を必要としている地域は数多くあったと思われますが、派遣期間の４日間で、救急車を使用した消防活動を行ったのは実質１日のみでした。多くの隊が待機のみで活動を終了させていました。被災地の需要に合わせた活動が行えるような体制作りを構築していくことが必要であると強く感じました。

緊急消防援助隊　３月２５日 ～ ３月２８日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第６次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　新倉直明、吉田英治、雲野文夫

後方支援隊　笹原優孝、政近年男

報告者　政近年男

派遣までの事前準備等

地震発生から２週間ほど経っていましたが、茅ヶ崎市内でもレトルト食品等をはじめとするインスタント食品が品薄の状態でした。そのため、被災地へ持っていく食糧の調達が非常に困難でした。また、車両や暖をとるための燃料の確保も同様でした。

確保した食糧

派遣の準備

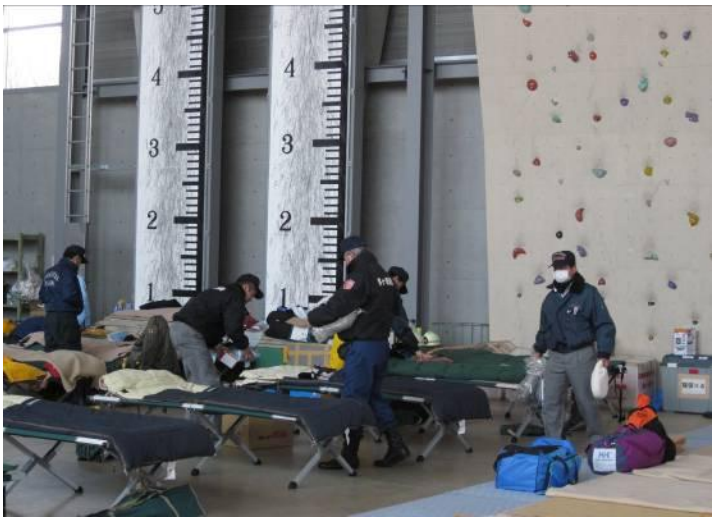
被災地での生活

現地での食事

被災地ではコンビニエンスストアやスーパーがすでに営業していましたが、依然として食糧不足の状態でした。そんな中で私たち支援者が現地で食糧調達をしてしまうと、現地の人々が困ってしまいます。そのため、被災地入りする支援者は食糧や燃料を必ず自前で調達する必要があると感じました。

暖をとるための秘策

今回の派遣では、活動拠点が消防学校であり、その体育館で仮眠をとりました。３月という時期で極寒の中でしたが、ある程度暖かく快適に眠る方法を前陣派遣隊から申し送られました。それは、ペットボトルに水を入れ湯煎し、湯たんぽとして使う方法でした。



仮眠場所の様子

仮眠場所の様子

派遣を振り返って

被災地での活動において最も重要なのは、事前準備であると感じました。劣悪な環境での支援活動のため、体調管理、食糧調達、燃料調達、情報収集などの事前準備がその後の活動の良し悪しに直結します。今回、私たちは発災後２週間経ってからの派遣でしたので、その準備期間にある程度の余裕があり、万全の体制で被災地へ行くことができたと振り返ります。今後被災地へ職員を派遣するにあたっては、送り出す組織が事前準備をさらにバックアップすることが重要です。

緊急消防援助隊　３月２８日 ～ ３月３１日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第７次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　鈴木友美、中島暢康、清水晃弘

後方支援隊　上田憲一、湯田 敦

報告者　中島暢康

出発までの状況

本市消防本部からの情報では、当隊は福島第一原子力発電所３０ｋｍ避難区域内で活動する可能性があると伝えられました。本市救急隊はそのような汚染区域内での活動を想定していなかったため、言葉で表せない不安に襲われました。個人的に情報を求め、３０ｋｍ圏内での活動を考慮して、活動資器材を救助隊・消防隊から借り受け準備しました。

被災地での活動

神奈川県隊の活動方針は３０ｋｍ圏内での活動はしないとの発表があり、第７次派遣隊としての活動はありませんでした。

救急搬送時における放射線に関する留意事項についての講義や、放射線災害に詳しい横須賀市消防局によるスクリーニング（放射線量検査、表面汚染検査のこと）等の説明は、大変有意義でした。この講義が無かった場合、我々の居住区まで汚染させてしまい被害を広げてしまったかもしれません。また、日ごろ使用していない放射線測定機器などの取り扱いについて心配していましたが、スクーリングも担当していただけると説明があり、気持ちが楽になりました。

派遣中何度か余震があり、大きめの余震の際に、当時の直属の上司から安否確認の連絡をいただき、とても感動しました。

横須賀市消防局による講義

放射線測定機器の説明

放射線測定器

放射線測定器

派遣を振り返って　救急隊が準危険区域内で活動を実施するかもしれない状況に直面したことは、考えさせられる事案でした。被災地を離れる際の心情として、被災された方々のために活動できなかったことが悔いに残り、活動中の隊員の方々に対しても大変申し訳なく、心苦しいという思いに尽きました。また、活動隊に同行しフォローしていただいた本部職員に感謝します。

緊急消防援助隊　３月３１日 ～ ４月　３日（４日間）

茅ヶ崎市消防本部　第８次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　竹永 寛、堤 好正、山際正則

後方支援隊　内田芳久、安彦 徹

報告者　堤 好正

緊急消防援助隊派遣仮決定から派遣日まで

茅ヶ崎市からの緊急消防援助隊としては、第８陣となる派遣隊員に任命され当日から個人装備の準備と放射線医学、放射線防御についての確認作業に入りました。同時に主に福島県内の余震の状況や福島第一原子力発電所施設の事故状況の推移について、また先遣隊の活動状況などを逐次情報収集していました。不安要素を１つずつ消していくための作業でしたが、実際には不安を抱える結果になっていました。

任務は、福島第一原子力発電所から約３０ｋｍ圏内の病院等に残っている傷病者を福島県内外の医療機関に搬送するというものでした。

震災から２０日目、３月３１日に被災地へ

神奈川県の各消防機関の援助隊と川崎市で合流し、福島県へ向かいました。東北自動車道は福島県に入ると大きな損壊部分は修復されていましたが、一部隆起していたり、亀裂が入っていたりと応急処置のみ施したといった状態でした。福島市内の消防学校に到着後、先遣隊から引き継ぎを受け、駐留の準備に取り掛かり、終了後は待機。その後は毎日２０時の県隊ミーティングで翌日の活動内容が示されることになっていました。

福島県へ向け出動

放射線防御についての講義

待機、情報収集、ミーティング、待機・・・

翌日からは、出動態勢を維持して、ひたすら要請を待つ状態が続きました。動かないこと、動けないことのストレスは、被災者の心情や立場から比べれば大したことではないと思いつつも、支援物資の搬送でも県内の巡回でも何でもいいから、援助隊として被災地のために実働させてほしいと考えていました。毎晩、放射性物質で汚染された大気の中でも、輝いている冷たい満天の星空を見ていました。

救急車内の様子

携帯型放射線被曝線量計

放射線測定の講義

消防学校からの風景

派遣を振り返って　被災地への派遣を経験して、何よりも感じたことは、災害の情報をどのようにとらえ、どのように活用するかということです。「想定外」が、常に想定より少ない被害、要救助者であるよう、判断し行動しなくてはならないのだと実感しています。その一方で、緊急時に情報がとらえられない状況では、受動的な対応ではなく、できることをとにかく実行する位の行動力が必要であるとも感じています。救急隊員であれば、被災地の病院に入り、看護助手の行う業務を助けるなど、緊急消防援助隊という枠組みでは活動できなかったものが、茅ヶ崎市独自で動けば可能であったと思います。また、被災地の要望に柔軟に対応できる体制作りが求められると思います。

緊急消防援助隊　５月４日 ～ ５月８日（５日間）

茅ヶ崎市消防本部　第１１次派遣隊

【派遣先】　福島県福島市

救急隊　内藤繁幸、高橋圭介、関戸博章

後方支援隊　譲原宏太、前真一郎

報告者　内藤繁幸

派遣が決まって

緊急消防援助隊として派遣されたのは今回が初めてでしたが、震災自体は急性期を過ぎていたため、不安は放射線に対することではなく、全く地理のわからない地で救急業務を行うことでした。

派遣中の活動

相馬消防署に待機する日以外の滞在中、福島市内及び相馬市内の地理把握を行いました。これにより震災の被害状況を間近に見ることができました。福島市内では震災で被災した家の屋根瓦が落ちる被害が多く、相馬市では津波により元の景色が分からない程の悲惨な状況でした。

相馬消防署

相馬市内の郵便局

相馬市内の倒壊家屋

陸に上がった船

津波被害状況視察

松川浦付近の建物

重油が入っていたタンク

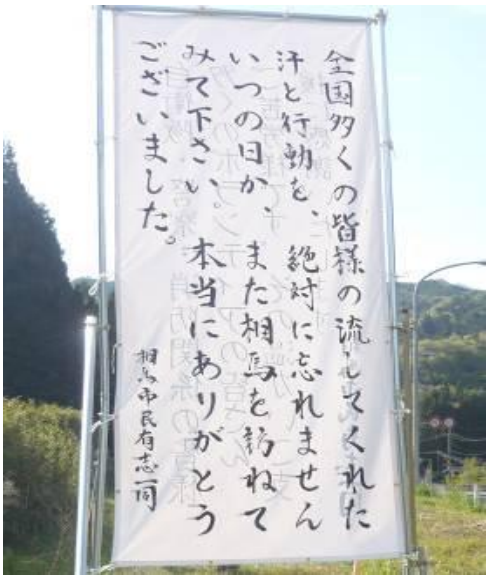
松川浦付近の道路

津波被害を受けた旅館

相馬消防署に救急派遣で待機中の昼過ぎに現地の消防職員から、津波の被害状況を見に行かないかとの申し出がありました。お互いそれぞれの仕事があるからと一度断りましたが、「見て、そして広げてほしい。」と言われ、約１時間案内してもらい、前日よりも詳細な被害状況を視察することができました。

現地の住民

滞在地の福島県消防学校周辺にあるコンビニエンスストアの店員、相馬市民の方々は、作業服姿の私たちに対し、「ご苦労様です」「ありがとうございます」等の労いの言葉をかけてくれました。自分たちが大変な思いや辛い思いをしているにもかかわらず、支援に来た我々に対する対応に胸が熱くなりました。



道中に数多く取り付けられた相馬市民からのお礼文

派遣を振り返って　今回の派遣の目的は、津波の被害を受けて救急車両を失った相馬消防署に昼間待機し、通常の救急要請に対応するためのものでした。相馬消防署では震災直後、患者宅へ向かっている最中に津波の被害に遭ったということです。震災後に起こった火災については消防団が対応し、消防職員は人命救助を最優先にした活動に限られたため、「目の前で起こる火災に対して見ていることしかできない歯がゆさを感じた」という言葉が胸に刺さりました。本市でも同じ事案が発生することが想定されるので、初動体制から職員のメンタル面に対するフォローに至るまで更なる対策が必要であると考えます。